今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。ローマ 3 章 21~22 節

イエスさまの話の続きです。②人の回復について学びましょう。前回は、①人間の堕落、つまり「全的堕落」について学びました。人は、最高の被造物として神のかたちに造ってもらったのに、神に背きます。神に背く「罪」の故に、人はやることなすこと考えることの一切が汚れて、神の前に正しく生きられなくなります。それで、何一つ神の目に「義」をなすことができず、「罪」ばかり犯すので、神に永遠に捨てられて滅びてしまうことになるのでした。

でも、神はそんな哀れな罪人を見捨てません。罪人を滅びから救うため、神はご自分の御子イエスさまを遣わします。イエスさまは、神ご自身であられる方なのに、第二のアダムとなって人としてこの世に生まれます。そうして、罪を犯した最初のアダムとは正反対に、神に従う生涯を歩みました。使徒パウロはこのことを次のように解説します。

「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」（ピリピ 2 章 6 ～ 8 節）

これによると、イエスさまは神ですが、父なる神に「人となれ」と言われれば、神であることを捨てて人になります。人の中でも「しもべ **δοῦλος**」つまり「『最下層の奴隷』になれ」と言われるとしもべになり、「死ぬ」よう言われると死にます。しかも、その死に方も数ある中で、「十字架で死ぬ」よう言われると、「十字架の死にまで従われた」のでした。

当時「十字架で死ぬ」ことは「死刑」を意味します。この世で最も死にたくない死は「死刑で死ぬ」ことではないかと思います。身内が「病死」した場合には「身内が病気で死んだ」と普通に人に話せます。でも、身内が重い犯罪で死刑になって死んだら、それを人に明かせるでしょうか。ある死刑囚の身内の方は、その死刑囚の証しが出版されるのに猛反対したそうです。最も不名誉で世間には知られたくない恥ずかしい死、誰もそう死にたくない死、それが「死刑の死」です。イエスさまが「十字架の死にまで従われた」と言われる時、それはイエスさまがこの世で最も苦しく恥ずかしい死を死なれたことを意味します。それ以上ないほど父なる神に従われたのですから、徹底的に父なる神に従われたことになります。つまり、イエスさまは神に従う「義人」としての生涯を歩まれたのです。最初のアダムは 100 %逆らう「罪人」でしたが、第二のアダム、イエスさまは 100 %神に従う「義人」です。人には「罪」しかありませんが、イエスさまには「義」があります。人には 100 %神に逆らう「罪」しかないのですが、イエスさまには 100 %神に従う「義」があるのです。

何より重要なのは、何のためにイエスさまは人となって世に来て、父なる神に従う生涯を歩まれたのか、ということです。それは、他でもない私たち罪人のためです。そもそもイエスさまは永遠に生きておられる神です。わざわざ苦労して人となる必要がありません。それなのに、貧しくなって人となり、それも苦しみと辱めに耐えて父なる神に従い抜いたのは、ひとえに私たちのためです。それ以外の理由はありません。何一つ神に従えない、罪深い私たちの身代わりとなって、イエスさまは、人となり、神に従い、そうして神に従い抜いたご自身の「義」を私たちのものとしてくださいました。

神に従うイエスさまは、神に背く私たちのように死なれました。つまり、義人なのに罪人のように死にます。と言うより、義人のイエスさまは罪人の死を死なれました。イエスさまが「わが神、わが神、どうしてわたしを見捨てたんですか」と十字架で叫ぶ時、義人で捨てられる必要のないイエスさまが、私たち罪人の受ける刑罰を受けたことを意味します。

こうして、イエスさまが十字架で死なれた時、私たちの「罪」が「イエスさまに転嫁」されました。つまり、100 %神に従うイエスさまに、100 %神に逆らう私たちの「罪」が「転嫁」されたのです。そして、同時に、それと引き換えに、イエスさまから私たちには、イエスさまの「義」が「転嫁」されました。つまり、100 %神に従うイエスさまの「義」が、100 %神に逆らう私たちに「転嫁」されたのです。こうして、私たちの「罪」を「転嫁」されたイエスさまは神のさばきを受けて十字架で死に、イエスさまの「義」を「転嫁」された私たちは神のさばきを免れて天国に行くことができるようになります。何一つ神に従えない罪人が、何一つ神に従えないままで、永遠の滅びを免れるのです。何一つ神に従うことができないのに、イエスさまの「義」をもらって 100 %神に従う者と神に認められ、つまり「義」とされて、神に受け入れられます。カルヴァンの言い方を借りるならば、「天上の法廷で『義の判決』を受ける」のでした。

天国という所は誰でも入れるわけではありません。天国に入れるのは義人だけです。罪人は天国に入れません。そもそも天国に罪人はいません。いるのは義人だけです。「義」が無いと誰も天国に入れないのです。しかも、その義は「律法学者やパリサイ人の義にまさる義」でなければ、とイエスさまは言います（マタイ 5 章 20 節）。律法学者は誰よりも律法を熟知し、パリサイ人は誰よりも律法を守る、誰が見ても「義人」です。「“人の義”の最高峰」です。でも、それでも天国に入れません。なぜでしょう？人は全的に堕落しているからです。人目は欺けても神は欺けません。天国に入るには、見せかけだけの堕落した「人の義」ではなくて、それを超えた「神の義」が必要です。それはイエスさまの義です。神に従い抜いた義「イエスさまの義」が必要です。これだけが「天上の法廷で『義の判決』を受ける」神の義なのです。

ここに罪人の救いがあります。パウロはこのイエスさまの義は無償で「与えられる」義だと言います（ローマ 3 章 22 節）。つまり、人が努力して自力で獲得する義ではなく、死ぬほど努力しても罪しか犯せない人間に、神が恵みによってただで「与えてくださる」義だと言うのです。このイエスさまの義をもらって、人は 100 %神に背くことしかできないのに、100 %神に従う者と認められて神に受け入れられます。これを「義認」と言います。宗教改革で確認された真理です。

イエスさまの義をまとう人間に、崩壊した「神のかたち」が回復します。そして、イエスさまの義をまとわせ、100 %神に逆らう者を 100 %神に従う者と認めてくださる神の恵みを悟った者は、喜んで神に従うよう生まれ変わります。悪魔のように神に逆らっているのに、イエスさまのように神に従う者と認めてくださっています。その神の恵みに驚き、畏れ、感謝して、喜んで神に従います。悪魔のように神に逆らうのを悔い改め、イエスさまのように喜んで神に従うのです。